

パラリンピックの将来についての一考察

One consideration about the future of the Paralympics

1K04A222-3

真室 光貴

指導教員

主査 宮内孝知先生

副査 石井昌幸先生

目的

筆者が小学生の頃、知的障害を持つ児童は、通常とは別のクラスで、専属の先生と1対1で授業を受けたり遊んだりしていた。その様子が学校の中で特に目立ち、「彼だけ自分たちとは違う世界にいるみたいだなあ」と、彼の孤独感を案じ、皆と同じクラスにいられた方がよいのではと思ったものであった。それと同じ思いを今、パラリンピックに対して筆者は抱いている。現在「障害を個性と捉える」という考えが呼びかけられているが、スポーツにおいても、健常者スポーツ・障害者スポーツと区別することなく、単にスポーツ種目の違いと捉えられないだろうか。そうすれば、オリンピック・パラリンピックという区別も消える。その発想が実現する可能性と、そのために乗り越えなければいけない課題を提示することが、本論の目的である。

方法

筆者は社会における障害者の立場が、そのままパラリンピックに映し出されているのではないかと仮説をたてた。第1章では、障害者が過去に健常者とどのような関係を構築してきたか、また現在はどうのような環境におかれているのかを検証する。第2章では、パラリンピックの歴史と現状において、オリンピックとどのような距離感を持ってきたかを示す。第3章では、障害者とパラリンピックの関係性を見出す。その際、筆者の仮説が論理として成り立てば、現在最も新しいとされる障害者思想を元に、パラリンピックが将来オリンピックとひとつの大会となるであろうということを提言する。

結果・考察

1975年から、国連によって障害者に関するキャンペーンが大々的に行われ、障害者ができる限り通常の生活をし、あらゆる文化活動に参加する権利が保障されるようになった。それからおよそ15年後の1989年、パラリンピックはオリンピックのような競技スポーツ大会へと成長を遂げている。

また、1960年代後半からは、主に教育の場において、障害者と健常者の活動の場を統合しようという「インテグレーション」の思想が謳われるようになった。その形態は主に3つで、「①行事などのときに養護学校

と通常の学校が交流するタイプ、②通常の学校の中に障害児学級が独立してあるタイプ、③通常学級の中で一日をともに過ごすタイプ」に分けられる。

オリンピックとパラリンピックにおいてもこの「インテグレーション」思想の適用がみられる。筆者は、その変遷を三段階に分けた。まず、1988年のソウル大会から1996年の間を「第一のインテグレーション」とし、4年に1度だけ両者が顔を合わせる運営・開催形態から、先に示したモデルの①との共通性を見出した。「第二のインテグレーション」は2000年のシドニー大会から2004年アテネ大会までとする。オリンピックとパラリンピックを総称して「シドニー2000」と名づけることで、両大会がひとつのくりであることが強調されたのだ。アテネ大会もまた同様であり、これらの形態はモデルの②に類似している。2007年現在の北京大会運営においては、パラリンピックをIPCと北京オリンピック組織委員会の共同で運営するという新たな動きが見られる。2010年のバンクーバー大会においてはさらに運営形態が変化し、同一組織がオリンピックからパラリンピックまですべてを主催することが決まっている。これが「第三のインテグレーション」であり、モデル③と共通する部分がある。このように、1960年代後半以来のインテグレーション思想が、数十年後のオリンピックとパラリンピックに形を変えながら投影されていることがわかった。

結論

以上に示した法則でいくと、数十年後には現在主流とされる「インクルージョン」思想がパラリンピック・オリンピックに反映され、両者は真の意味でひとつになることが予想される。「インクルージョン」とは、障害のある者となない者という二つの対立しがちな概念で考えるのではなく、ひとつのくりの中ですべての人がニーズを持っていて、障害はそのニーズを要するひとつに過ぎないという考えである。この思想を具現化する場合に両大会が乗り越えなければならない課題は、主に競技場使用方法などの物理的な面と、スポンサーや報奨金をどのように分配するのかといった金銭的な面で残っている。どれも大仕事になることは間違いないが、解決できない問題ではない。近い将来、パラリンピックにまた新たな風が吹くかもしれない。